

「平和で王のいない時代」における 「＜文化＞の地政学的枠組み理論」

ーバイオダーウィニズムにおけるミスマッチ論、的に修正された＜合理＞的選択ー

桜 井 芳 生

【イントロダクション】

まだまだ十分とはいえないが、ここにきて数年来自分がやってきたことやろうとしてきたことやろうとしていることが、一つのラインとしてつながってきたように感じた。もちろん、この種の「構想」は、大なり小なり誇大妄想的な、あるいは、絵に描いた餅的な、ものにおわりがちである。そうならないためにも、まずは、「絵を描き」その構想図にそって手作業をおこない、構図と作業の相互検証のなかで構想を彫琢するしかないだろう（もちろん、その結果、全然駄目、と判明するかもしれないが…。いうまでもなく、「全然駄目」なら、一日も早くそうであることが判明したほうがいい）。



自分への確認も兼ねて、私の構想を、名付けてみよう。すなわち、

「平和で王のいない時代」における「＜文化＞の地政学的枠組み理論」

ーバイオダーウィニズムにおけるミスマッチ論、的に修正された＜合理＞的選択ー

で、ある。

【＜文化＞の定義】

文化の理論を目指す以上は、「文化」の定義をしておくことが望ましい。いうまでなく、「文化」の定義はさまざまある。以下述べるように、私の「文化」概念の定義は、少数派である。注意すべきは、私は「文化」概念の定義問題について、他の諸派と争う気はまったくない、ということだ。私は本稿と異なった「文化」概念の定義をまったく妨げる気はなく、その定義の生産性については、「その道具をつかった結果（産物）」でのみ、プラグマティックに評価したい。また、本稿の「文化」概念の定義の生産性の良さについて私は仮説的に信頼しているが、その「生産性」とは実数的に「大

小」で比べられるというよりも、本稿の定義のそれによる探求は他の定義による探求とは「かけがえのなくちがった視点」をもたらすだろうからである。いわば、本稿の定義について「量的生産性」を信頼しているのではなくて、「質的生产性」を信頼しているのである。

以下私の定義する「文化」を他の定義のそれと区別するために、<文化>と表記することにしよう。

では、<文化>の定義を述べよう。すなわち；

「<文化>とは、ヒトの行動・表象のうちで、なんの腹の足しにもならない、のに、望ましいもの、価値あるもの、として評価されているものの謂である。」

ヒトは、かならずしも自分の腹のたしにならないようにことに、手間暇カネなどの資源を投入する。これらの事象のうち、だれかから、価値あるものとされていることを<文化>あるいは<文化的>なるものと呼ぼうというわけだ。

この<文化>定義については、既拙稿（桜井2011）で、もうすこし論じたので、本稿では先を急ごう。

【イメージマーケティングのための、ケーススタディ（計量研究）】

さて、本節以下では、まず、読者にイメージをもっていたくために、私が学生たちとやった計量研究の一つの事例を紹介しよう。（調査の概略については、付録を参照せよ）。

本調査は、学生たちの複数の「チーム」によるオムニバス調査であった。



まず、注目するのは「脚衣料チーム」(!)が、提案した以下の諸設問である。（設問の直後にある小文字のアルファベットは設問番号）

「脚のおしゃれが好きですかbd

6. かなり、そう。 5. まあ、そう。 4. どちらかという、そう。 3. どちらかいうと、そうでない。 2. まあ、そうでない。 1. まったく、そうでない。

以上10個の設問に対する回答を、まず、主成分分析にかけてみた（プロマックス回転）。以下がその結果である。

説明された分散の合計

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和 合計
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%	
1	2.888	28.883	28.883	2.888	28.883	28.883	2.476
2	1.952	19.519	48.401	1.952	19.519	48.401	2.492
3	1.157	11.568	59.969	1.157	11.568	59.969	1.363
4	.979	9.789	69.758				
5	.777	7.774	77.532				
6	.628	6.276	83.808				
7	.592	5.921	89.729				
8	.437	4.368	94.097				
9	.327	3.270	97.366				
10	.263	2.634	100.000				

因子抽出法: 主成分分析

パターン行列^a

	成分		
	1	2	3
bdasisyare	.121	.807	-.050
bekutusita	-.035	.551	-.281
bfanasute	-.121	-.093	-.647
bgyasusa	-.043	-.039	.815
bhnhai	-.331	.559	.205
biasisyare	.039	.733	-.025
bjsukasi	.028	.706	.162
bktaitu	.853	-.046	.115
blnamasuku	.859	-.077	.076
bmiseiniga	.882	.187	-.089

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 4 回の反復で回転が収束しました。

前表より、固有値1を超える第三主成分までの累計で、データの分散の59.969%を分析できることがわかる。

後表をみよう。まず、成分「1」に着目しよう。成分1にたいして、高いスコアを示している質問(変数)は、

bktaitu タイツをはかないと、短いボトムスやスカートをはけませんか? bk

blnamasuku 一年を通して生足で外出するのがすくないですかbl

bmiseiniga 異性に脚をみられるのが苦手ですかbm

であった。このことに鑑み、この「第一主成分」を「守り系主成分(1)」と呼んでみよう。

成分の「2」に注目しよう。成分2にたいして、高いスコアを示している質問(変数)は、

bdasisyare 脚のおしゃれが好きですかbd

biasisyare 自分をよくみせるために、脚おしゃれ用品(くつ下、タイツ、レッグウォーマー)をつかいますかbi

bjsukasi すかし系タイツをはきますかbj

bhnhai ニーハイは好きですか(女性は履くのが。)bh

であった。このことに鑑み、この「第二主成分」を「攻め系主成分(2)」と呼んでみよう。

成分の「3」に注目しよう。成分3にたいして、高いスコアを示している質問(変数)は、

bgyasusa デザインやブランドよりも値段の安さ重視で靴下を購入しますかbg

bfnasute (反転)靴下に穴があいたらすぐに捨てますかbf

であった。このことに鑑み、この「第三主成分」を「節約系主成分(3)」と呼んでみよう。

つぎに、どのような回答者が、この「主成分1～主成分3」を比較的たかく志向していたのかをみるため、回答者の他の属性(回答)を独立変数とし、各人の個々の主成分の得点を従属変数とする、線形重回帰分析をおこなってみた。

独立変数には、他のチームが発案した設問は、原則として入れず、

「社会・経済・生理・的、変数」と呼びうるものを入れた。この回答者の「社会・経済・生理・的、状態」のことを、約して、SEP-Sとも呼ぶことにする。

「社会・経済」的変数とは、具体的には、通常の世界調査で、いわゆる「フェースシート」にあたる諸質問（諸変数）である。

「生理的変数」とは、今回は、身長・体重、それによって算出されたBMI、容姿、性別、2D:4Dレシオ（後述）、である。

また、回答者のパーソナリティを計測するため、ニューカッスル・パーソナリティ評定尺度表を利用した。（ここで、つかわれる12項目の設問を聞くことで、「ビッグファイブ」と呼ばれる、パーソナリティの5大因子を算出した）。(Nettle 2009)

まず、上記の「第一主成分＝守り系主成分（1）」を従属変数とし、上記のSEP-Sをすべて（女性のみ分析なので性別は除く）独立変数として投入し、分析者の恣意をさけるため、SPSSの「変数減少法」で、モデル選択をおこなった。

独立変数の有意確率がすべて10%未満となったものは、最終モデルの以下のモデル14のみであった。

係数 a

モデル	標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準偏差誤差	ベータ		
14 (定数)	1.177	.320		3.682	.000
df2koiiru	-.296	.176	-.151	-1.683	.095
diyousi	-.122	.073	-.152	-1.669	.098
gaiko	-.071	.036	-.173	-1.944	.054

a. 従属変数 REGR factor score 1 for analysis 16
(調整済み R 自乗値 = 0.088)

上記のとおり、定性的にいえば、「df2_koiiru恋人がいない」ひとほど、「di_yousi容姿の自己評定が低い」ひとほど、「gaiko外向性のスコアが低い」ひとほど、第一成分（守り系成分）が高いわけである。

直観的にも、非常に納得のいく、関係ではないだろうか。

同様に、「第二主成分＝攻め系主成分（2）」を従属変数とし、上記の SEP-S をすべて（女性のみ分析なので性別は除く）独立変数として投入し、分析者の恣意をさけるため、SPSSの「変数減少法」で、モデル選択をおこなった。

独立変数の有意確率がすべて10%未満となったものは、最終モデルの以下のモデル12のみであった。

係数 a

モデル	標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準偏差誤差	ベータ		
12 (定数)	-1.603	.635		-2.525	.013
deseiseki	-.181	.102	-.152	-1.774	.079
df2koiiru	.336	.184	.165	1.827	.070
diyousi	.206	.075	.246	2.762	.007
gaiko	.081	.037	.189	2.186	.031
sinkesitu	.096	.043	.193	2.251	.026

a. 従属変数 REGR factor score 2 for analysis 16
(調整済み R 自乗値 = 0.155)

上記のとおり、定性的に言えば、「de_seiseki 中学時代の成績がわるく」「df2_koiiru 恋人がいて」「diyousi 容姿の自己評定が高く」「gaiko 外向性のスコアが高く」「sinkesitu 神経質性向のスコアが高い」ひとほど、第二成分（攻め系成分）が高いわけである。

これまた、直観的にも、非常に納得のいく、関係ではないだろうか。

同様に、「第三主成分＝節約系主成分（3）」を従属変数とし、上記の SEP-S をすべて（女性のみ分析なので性別は除く）独立変数として投入し、分析者の恣意をさけるため、SPSSの「変数減少法」で、モデル選択をおこなった。

独立変数の有意確率がすべて10%未満となったものは、最終モデルの以下のモデル13のみであった。

係数 a

モデル	標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準偏差誤差	ベータ		
13 (定数)	1.014	.430		2.358	.020
cbhitosa	-.141	.045	-.271	-3.135	.002
dp1jikka	-.310	.171	-.155	-1.810	.073
gaiko	-.066	.038	-.152	-1.738	.085
kaihosei	.046	.026	.150	1.743	.084

a. 従属変数 REGR factor score 3 for analysis 16
(調整済み R 自乗値 = 0.102)

cb_hitosa この変数については、説明が必要だろう。アンケートの設問文は以下であった。

「あなたの左手を手のひらのほうからみて、人差し指と薬指とを比べると、人差し指のほうが長い(上にまで伸びている) ですか。cb

6. かなり、そう (人差し指が長い) 5. まあ、そう 4. どちらかといえば、そう 3. どちらかといえば、そうでない 2. かなり、そうでない 1. まったくそうでない(薬指が長い)」

これはいわゆる「2D:4D」レシオの議論を踏まえたものである。胎児期のホルモンバランスが注目される場合があるが、非侵襲的にそれを正確に計測するのは不可能である。それで、代替指標として、注目されているのが、手の人差し指の長さを薬指の長さで割った比(2D:4D)である。この値が1より小さいほど「男性的」で、胎児期に強くアンドロゲンホルモンの影響を受けたことを示すとされている。(坂口2010)

本アンケートでは、人差し指が長い方が高い点をふってあるので、このスコアが高いほどホルモンのには「女性的」となるわけだ。

すなわち、上記のとおり、定性的に言えば、「cb_hitosa ホルモンのにあって、女性的でなく」「dp_1jikka実家住まいの傾向が高く」「gaiko外向性のスコアが低く」「kaihosei(経験への)開放性のスコアが高い」ひとほど、第三成分(節約系成分(3))が高いわけである。

上の「実家住まい」とはつまりひとり暮らしでない、ということである。母親などが同居しているので、自分だけの判断で靴下を捨てられない、母親のみたてで母親が靴下を買ってくる（少なくない）ということだろうか。

最後の「(経験への) 開放性」の含意についても、注意が必要だろう。ビッグファイブ説の唱導者の一人ネトルが、「詩人」と表現しているように、この因子は、いってみれば、「芸術家はだ」のようなもので、他人の目にどう映ろうとも、靴下などに、コストなどかけず（かけることは少なく）、自分の関心のあることに資源を投入しているのかもしれない。



【第一第二成分の検算的解釈、と、第三成分の解釈修正。「方面」とそれへの「3つの対処」】

ここで、第一・第二主成分（への解釈=命名）を、それぞれに対して採用した重回帰モデルから、「逆にふりかえって」みよう。

まず、便宜上、「第二主成分」から再考してみよう。この「第二主成分」をどのような個人が「強く、あるいは、弱く」志向しているかをみるため、個々人の「第二主成分」のスコアを従属変数、SEP-Sを諸独立変数とする、線形重回帰分析をおこなったのであった。モデル選択（独立諸変数の選択）について、分析者（筆者桜井）の恣意がはいるのをふせぐため、3つの主成分について、同様に、おなじSEP-Sを、独立変数候補として投入し、同様な「変数減少法」によって、最終的に残ったモデルを、採用したのであった。つまり、ここには、分析者の恣意が介入する余地はなかった。

その結果、第二主成分からかんがえてみるが、第二主成分を「説明」する諸変数とその傾向として、「de_seiseki中学時代の成績がわるく」「df2_koiiru恋人がいて」「di_yousi容姿の自己評定が高く」「gaiko外向性のスコアが高く」「sinkesitu神経質性向のスコアが高い」が、非恣意的なアウトカムとなったわけだ。

ちょっとここで、マイクロ地政学的な、メタファーをイメージしてみよう。

現代日本の若年女性の目の前に、「脚の衣料をどうするか」という「戦線」「方面」「土俵」「フィールド」があるとイメージしてほしい。

↓

もしあなたが、知能はあまりよくないが、恋人がいるほど魅力的で、自分でも容姿に自信があり、

外向性がたかい、「女性<文化>戦士」であったとしたら、「脚の衣料」という「武器・戦術」に、「資源を投入し」て、「攻めに打って出る」ことが、いちばんありそうなことになるのではないだろうか。

慧眼な読者は、本節において、筆者が、前述ですでおこなっていた「第二主成分」の解釈・命名を、本節において、(敢えて)再記していなかったのに、気づかれているだろう。そうなのである。じつは、第二主成分は、それを構成していた元の変数(質問)を、想起しなくても、それを説明する重回帰分析の諸独立変数を見るだけでも、「攻撃」的と解釈したくなるようなものなのである。

いわば本節の議論は、合計算をしたあとの、検算のようなものだ。はじめの手順とは、逆の「後ろ」からだとしていっても、同様な結末に到る。そのことで、当初は、(結局のところは)分析者の「解釈」だった第二主成分の「命名」が、ヨリ大きな説得力・非恣意性をもつことになる。

ミクロ地政学的メタファーにもどり、第一主成分を考えてみよう。

定性的にいえば、「df2_koiiru恋人がいない」ひとほど、「di_yousi容姿の自己評定が低い」ひとほど、「gaiko外向性のスコア」が低いひとほど、第一主成分が高かった。またその第一主成分に大きく寄与していたナマ変数は、

「bktaitu タイツをはかないと、短いボトムスやスカートをはけ」ず、
 「blnamasuku 一年を通して生足で外出するのがすくな」く
 「bmiseiniga 異性に脚をみられるのが苦手」なのであった。

両者を鑑みて、また、第二主成分の「攻め」に対比的に、

↓

目の前に、「脚の衣料をどうするか」という「戦線」「方面」「土俵」「フィールド」にたいして、

↓

「脚の衣料」という「武器・戦術」に、「資源を投入」するにしても、「防御的」にふるまっている、といえそうではないか。

【3つめの手】

さて、第三主成分についても再考したい。これは、前半では、「節約系」成分とのべた。それ自体はさほどのを外しているとは感じられないが、そのスコアが高いヒトは、「cb_ hitosa ホルモンのいって、女性的でなく」「gaiko外向性のスコアが低く」「kaihosei（経験への）開放性のスコアが高い」

まず、「kaihosei（経験への）開放性のスコアが高さ」に着目しよう。ネットが「詩人」と表現しているとおり、「独創性・創造力に富む・エキセントリック」なひとがこのスコアが高くなる。

↓

また、cb_ hitosa ホルモンのいって、女性的でなく」「gaiko外向性のスコアが低く」の点に注目すると、

↓

このスコアの高いひとは、（女性なのに）あまり女性的でなくあるいは女性的であろうとしていないのかもしれない。また外向性のスコアが低いことから、他人と付き合い、ひいては、他人に、みえをはることをあまりしないのかもしれない。

以上を鑑み、また、前述の「攻撃」「防御」との対比も込めて、「やりすぎし」系と呼びなおしてみたい。

現代日本の若年女性の目の前に、「脚の衣料をどうするか」という「戦線」「方面」「土俵」「フィールド」があるのだとしても、

↓

「平和で王のいない時代」である。

↓

べつにこの「戦線」で、「攻ないし防」をしなくても、生きていける。



この点をかंगाえて、第三成分にあたる、「女性<文化>戦士」の「対処」を「やりすぎし」と暫定的に呼んでみよう。（この呼称には、とくにこだわらないので、ベタープランがあったら、ぜひ、ご教示いただきたい）

【枠組み・理論の構図】

さて、以上で、ケーススタディというか、導入の例示はおわりである。

以上から私が示唆しようとした、枠組み・理論の骨子的なポイントを列挙してみよう。

・「平和で王のいない時代」において、各人は、目前にある<文化>的戦線（方面・土俵・フィールド）にたいして、地政学的「対処」決定を迫られる。

・ただし、厳密な地政学的戦略的現実とはことなり、このメタファーにおいては、対処の類型は、「攻撃」「防御」「やりすぎ」に三大別される。

・各人が以上3つの「対処」のどれを選択するかは、彼女・彼の、社会・経済・生理、学的状態（SEP-S）によって、影響される。

【一戦線モデルと全戦線モデル】

・各人は、目前の「前線」にたいして、自分が投入しうる「資源（SEP-S）」の質・と・量を勘案して、自分の<文化>的主観的満足が、最大化するよう、少なくとも、減少しないよう、おもに「攻撃」「防御」「やりすぎ」の三対処のうちの一つを選択する。

おおくの読者にとって、いうまでもないだろうが、以上は、一戦線モデルと呼ぶ。

よって、当然、多（全）戦線モデルと呼ぶ、図式も発想しうる。すなわち；

・各人は自分が直面している、「諸」・局面、と、自分が投入しうる、資源の「量・質」とを勘案する。

↓

そして、どの「局面」にどれほどの諸・資源を「攻撃的」にあるいは「防御」的に投入するか、あるいは「やりすぎ」かの、いわば「ポートフォリオ」を、形成する。そのポートフォリオによって、自分の<文化的>満足が最大化するよう「ポートフォリオ」を組む。

↓

さらに精密なモデルが現実に近い場合には、他者たちの、以上の、「ポートフォリオ」形成をも「織り込んで」（「同一の



一つの局面」に多くの者が大きく資源投入してもそこから得られる<文化的>満足は遞減する場合が多いだろうから)、自分のポートフォリオ形成をおこなう。(モデル上は、これを無限回繰り返して、収束する場合に、安定均衡と考える)。

【<文化的>満足、とは？】

読者は、ここで、筆者が、<文化的>満足という概念をだしたことに疑念をもつかもしれない。

↓

しかし、これは、本稿の、<文化>定義を踏まえたものである。

本稿の<文化>の定義とはこうだった；

「<文化>とは、ヒトの行動・表象のうちで、なんの腹の足しにもならない、のに、望ましいもの、価値あるもの、として評価されているものの謂である。」

↓

すなわち、以上でうる「価値」評価が、個人によってされる場合のそれが、とりあえず、「個人的な<文化的>満足」である。

↓

しかし、いうまでなく、「社会」においては、「(特定・不特定・一般的) 他者・ひと (びと)」から「評価」されることが個人的に嬉しい(個人的な評価となる)場合も少なくない。ので、厳密に再定式化すると、個人の<文化的満足>とは

↓

「ヒトの行動・表象のうちで、なんの腹の足しにもならない、のに、「(特定・不特定・一般的) 他者・ひと (びと)・つまり自分も含みうる」から望ましいもの、価値あるもの、として評価されている、(そのことがさらに「(特定・不特定・一般的) 他者・ひと (びと)」から評価されている(「(特定・不特定・一般的) 他者・ひと (びと)」に評価されている…)) ことについての個人的評価である。」

【バイオダーウィニズムにおけるミスマッチ論】

上記の<文化的>満足と関連して、「表題」にもある「バイオダーウィニズムにおけるミスマッチ論、的に修正された<合理的>選択」の文言についても説明しておきたい。

お気づきの読者も多いかとおもうが、本稿の<文化>定義は、バイオダーウィニズムにおける、「性淘汰の理論」を下敷きに考えている。バイオダーウィニズムでは、より多くの食料などの資源にア

クセスでき、捕食者から捕食されず、それだけより多くの子孫が残せる血統が、より多くなる、というほとんどトートロジーカルな、洞察が、その本質をなしている。

しかし、あきらかに「より多くの食料などの資源にアクセスでき、捕食者から捕食されない」点に寄与せず、むしろ、その邪魔になるような行動・属性が、生物にはみられることがある。ライオンのたてがみとか、オナガドリの尾、孔雀の尾、… などである。

ダーウィン生物学ならびに進化心理学的には、個体の生存に直接利することにないときに、個体の生存の可能性を減ずるようなことに、生物個体は資源を投入することがある。それはなぜか、という問題がある。ダーウィン生物学ならびに進化心理学の回答は、それらはほとんど「性淘汰の産物である」というものだ。すなわち、ライオンのたてがみや、オナガドリの長い尾のように、それ自体その個体の生存に資することなく、資源の浪費にみえるようなことが、なぜ、生存・再生産の進化史のなかで、残存し発展してきたのか。ダーウィン生物学の回答は、それは、「異性から選ばれる」という「性淘汰において正の機能をもっていたからだ」ということになる。なぜ、それでは、そもそもその異性はそのような特性を配偶者選択において選好したのか、という問が生じる。これにたいしては、このようなたてがみやながい尾が、適応度指標の機能を担えたからだ、という回答になる。すなわち、直接は観察できない配偶者候補の、隠された資源の豊かさ（健康その他）のシグナリングとして機能してきたからだ、というわけだ。

私の<文化>定義における「なんの腹の足しにもならない、のに、望ましいもの、価値あるもの、として評価されているもの」の文言は、上記の性淘汰の理論を念頭においている。

分かりやすさのために、端的にいってしまえば、ヒトにおける<文化的なるもの>のほとんどは、上記の「性淘汰」の産物であろうとみとおしている。

ただし、いわゆる「有史以来」の人間を考えるさいには、かなり大きな着眼姿勢の修正が必要だ。

現在の人間においても、ヒトの遺伝的遺産は、「約十万年から一万年前のあいだにおこった進化的な変化」(Nesse・Williams 1994=2001:204)のなかで獲得した遺伝的特性が、大部分を占めている、と考えられている。

「過去一万年のあいだにも、自然淘汰によって人間は多くの小さな点で変わってきたが、これは、進化的な時間の尺度ではほんの一瞬である」。

このように、人間の進化的特性の大きな部分を形成した環境のことを、現代人間進化論では、「進化的適応環境 (EEA: the environment of evolutionary adaptedness)」と呼ぶことが多い (Nesse・

Williams 1994=2001:204)。

このような「石器時代の状態に適応し」(Nesse・Williams 1994=2001:204)た遺伝的特性が、現代社会の環境のもとで、ヒトの行動に影響をあたえている。したがって、「石器時代の環境のもとで、適応度指標として性淘汰のなかで生き残ってきた」遺伝的特性がヒトに振舞わせる行動が、現代社会においても、適応度指標として性淘汰のなかで機能をもつとは限らない。

私は、ネシー・ウィリアムズのように、このような「私たちの体の設計と現代の環境との間の mismatches」((Nesse・Williams 1994=2001:ii)に注目するアプローチを行う。

したがって、EEAの時代においては、<文化的なるもの>も、ほとんどは、各血統の「性淘汰」における「サバイバル」に資するという機能を有していたとかがえられるが、

↓

現在の「ポストEEA」時代においては、これら<文化的>行動が、究極的に何にやくだっているのかわからない場合がおおい。EEA時代の遺物である「価値観」(選好・好み)だけが、見かけはかわっているとしても残存していること多いだろう。その選好は、EEAでは、究極的は、その血統の(拡大)再生産に資していた。(というか、そうでないような、血統は消滅していた)。

そうであるのに対して、ポストEEAにおいては、(腹のたしにもならない)諸価値(選好)を、更に評価できるような、価値のヒエラルキー・価値の最終審はなくなっている。

そのような「価値」観のもとで、自己の満足を最大化するように、SEP-Sを中心とする諸・資源の投入量を、「攻撃」「防御」「やりすぎ」の三大対処類型に、さらに、同様な諸「戦線」に投入していく…、これが、本「理論」の骨子である。上記の意味での、個々人の<文化>(諸)戦線での選択を(満足最大化という意味で)<合理的>選択とよびうるだろう。

ここでの<合理的>選択は、適応度最大化に利する意味をまったくもたなくなっているばかりか、「性淘汰」における異性個体から選択される蓋然性の最大化という意味をも必ずしも持たなくなっているのだ。だから「合理的」と呼ばないことにしよう。

【現代社会学における「理論」とは】

「理論」「理論」というが、「理論」とはなにだろう。

現代社会学において、「理論」が、仮説(反証可能性をもった命題)あるいは、(その意味での)仮説群、からのみなる、そして、仮説が「反証」されるのと同時に、当の理論は棄却されるというの

は、「きつすぎる」要請だろう。

どんなありそうな仮説を立てたとしても、その「反証」をさがしだすことはそれほど難しくないのではないか。

では、現代社会学にとって「理論」とは、なんだろうか。

↓

もちろん、定義は、各論者のかってだが、

↓

私は、「理論」とは、分析対象を分析していくうえでの「ヒューリスティック（簡便算法）」（ないしその集合）と考えるといいとおもう。

目の前に、たとえば、「現代若年女性の<文化>」という分析対象があったとしよう。

なにもない丸腰では、社会調査用のアンケートもつけれない。初発の手がかりとして、この理論はおもしろそうではないか。この理論からの個別の反証可能仮説が、反証されたら、そこからまた、「考えるタネ」が生じるだろう。

【この理論は、ユニークである】

こう論じてくると、本稿で示した「理論」は、意外に常識的なもので、さほど目新しものではない、と社会学者である読者は感じられるかもしれない。

↓

しかし、もしあなたが日本の社会学者なら、これは、コロンブスの卵のような「錯覚」である。その証拠がある。

日本の社会学的調査ではほとんどの場合、本稿で、重要なエレメントとして重視した「生理的変数」（身長、体重、容姿、2D:4Dレシオ、…）を、計測してこなかったではないか。調査設計者が、本稿の「理論」のような発想をしていなかった証左である。

了

(調査の概略)

2011年12月～2012年1月に、南九州のある国立大学法人の学生たちによって、周囲の学生を中心とする知人たちを対象にして、三段階スノーボール式非無作為抽出によるアンケート調査をおこなった。依頼数172トリオ、回収数73トリオ。回収率42.4%であった。今回は、残念なことに回収数が非常に少なく、そのままでは、統計的分析に耐えなかった。そのため、サンプリング上の問題があるがやむなく、第二、第三、回答者の回答も第一のそれと合算して分析した。

謝辞

いうまでもなく、本稿はブルデュー学派の一連の著作に多くを負っている。また、片岡栄美氏の著作ならびに氏からのご教示に多くを負っている。両氏に深く謝意を表する。が、両氏とも、本稿に賛同はされないだろう。本稿にありうべき誤りの責はすべて桜井にある。アンケートに回答くださった皆さん、アンケート調査をともにしてくれた学生の皆さんに深く謝意を表する。脚衣料の写真撮影・掲載を許可くださった方々に深く感謝します。

文献

- Elias, Norbert. 1939. *Über den Prozess der Zivilisation : soziogenetische und psychogenetische Untersuchungen*. Haus zum Falken.(= 赤井 慧爾, 中村 元保, and 吉田 正勝. 1977.ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷: 法政大学出版局.)
- . 1969. *Die höfische Gesellschaft : Untersuchungen zur Soziologie des Königtums und der höfischen Aristokratie mit einer Einleitung : Soziologie und Geschichtswissenschaft*. Luchterhand.(= 波田 節夫, 中埜 芳之, and 吉田 正勝. 1981. 宮廷社会: 法政大学出版局.)
- Nesse, Randolph M., and George Christopher Williams. 1994. *Why we get sick : the new science of Darwinian medicine*. Times Books.(= 長谷川 真理子, 長谷川 寿一, and 青木 千里. 2001. 病気はなぜ、あるのか: 進化医学による新しい理解: 新曜社.)
- Nettle, Daniel. 2009. *Personality : what makes you the way you are*. Oxford University Press.(= 竹内 和世. 2009. パーソナリティを科学する: 特性5因子であなたがわかる: 白揚社.)
- 坂口, 菊恵. 2010. “テストステロンとコミュニケーション (特集 メンズヘルス).” *総合臨床* 59(7):1557-59.
- 桜井, 芳生. 2011. “無距離化する音楽・文化の社会学のための「文化」の暫定的定義: 自分の声で歌え/ディスタンスから、バイオダーウィニズム的救済(悟り)へ?” *人文学科論集: 鹿児島大学法文学部紀要* (74):1-49.

yoshiosakuraig@gmail.com

<http://homepage3.nifty.com/sakuraiyoshio/index.html>